

「命を与える主」

ヨハネによる福音書 5:19-30

先週、私たちはヨハネによる福音書 5 章 1 節-9 節までの記事を通して、イエスさまがエルサレムのベトザタの池のほとりで 38 年間も病で苦しんでいた人を癒されたことを学びました。イエスさまは、多くの人が集まる荘厳で賑やかなエルサレムの神殿よりも、みんなが避けて通るような、多くの病人や障がいをもつ人々が身を寄せ合うこの池のほとりに赴き、その中で最も助けを必要としているこの病人に目を止め、「良くなりたいたいのか」と声をかけられました。先週申したように、この「良くなりたいたいのか」というイエスさまの問いかけは、上から目線の厳しい質問ではなく、「良くなりたいたいだね」という相手の痛み苦しみに寄り添い、相手を受け入れる問いかけであったのです。その問いかけに、この長年病んでいた病人は心を開いて、「主よ」と呼びかけ、「水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りていくのです」と自分の悩みと悲しみを打ち明けたのです。イエスさまから受け入れられることによって、彼の閉ざされていた心が開かれ、イエスを「主」と告白し、自分の心のうちにある辛さ悲しみを打ち明けたのです。

この病人の悩みは、池の水が動いたとき、天使が舞い降りてきたので、真っ先に水に入った者はどんな病気でも癒されるという伝説によるものでした。水が動くと、病人たちが我先にと競って水に入って行くで、彼はいつも取り残され、すっかり希望を失っていたようです。長年の病気の苦しみに加えて、だれも自分を助けてくれない、みんなから見捨てられているという寂しさは、どんなにか辛く寂しい思いであったらうかと思います。

今日の競争社会の中で、このような取り残された寂しさ、だれからも顧みられない辛さを担った人たちが大勢いることを私たちは忘れてはならないと思います。

イエスさまは、この病人の悩み悲しみを聴いて、「それでは、わたしがあなたを池の水に入れてあげましょう」と言われませんでした。他の人を出し抜いて、先に彼を水の中に入れてあげる手助けをしたとしても、それによって、少しも問題は解決しないからです。イエスさまは、むしろ、そのような偽りの迷信を拒否し、「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」と言われたのです。彼の問題の解決は、他人との競争に勝って勝者になることではなく、「命の力」を与えられ、自分の足で、自分なりの人生を生きることにあつたからです。「起き上がり、床を担いで歩きなさい」。主イエスの言葉を聴いて、この病人は「すぐに良くなって、床を担いで歩き出した」(9 節)のです。

イエスさまは、この 38 年間も病に苦しみ、最も悲惨な状態にある彼を立ち上がらせ、

この池から去らせることにより、このほとりに身を寄せるすべての人々に、迷信から解放され、新しい命に生きる道を示されたのではないか、と思います。

このベトザトの池で行ったイエスさまの奇跡は、10節以下を見ると、エルサレムのユダヤ人たちに大きな衝撃を与えたことが記されています。それは、その日がたまたま「安息日」であったことから、ユダヤ人たち、ことに祭司や律法学者・ファリサイ派の人たちでしょう、癒された病人が床を担いで神殿の境内に入っていくと、彼を捕らえて、「今日は安息日だ。安息日に床を担いで歩くことは、律法で許されていない」(10節)と咎め、この病人を癒されたイエスさまをも「迫害し始めた」(16節)というのです。

彼らは、長い間病んでいた人が癒され、新しい命に生かされたことを共に喜ぶよりも、掟にとらわれ、人を裁くことに終始しているのです。そこにエルサレムの指導者たちの愛のない形式ばった「権威主義」が露呈しているようにおもいます。

それに対してイエスさまは、言われたのです。「わたしの父は、今もなお働いておられる。だからわたしも働くのだ」(11節)と。たしかに安息日は、神さまが天地を造られ、そのすべての業を終えられ休まれたことを記念して、奴隷から家畜に至るまで、すべての者が労働から解放されて、休むように定められた日です。それは「人のために設けられた戒めで、戒めのために人があるわけではない」わけです。イエスさまは他の福音書の中でもたびたび、律法学者たちと、安息日のあり方をめぐって論争していますが、ここでは、神さまは、安息日の主でもあり、今も休みなく働いておられることを強調されたのです。「わたしの父は今もなお働いておられる」と。

ユダヤ人の指導者たちは、イエスが神を「父」と呼んで、自分を神と等しい者とされたということに憤り、「イエスを殺そうとねらうようになった」(18節)のです。「安息日を破るだけでなく、神を御自分の父と呼んで、ご自分を神と等しい者とされたからである」というのです。

そこで、19節以下の今日の箇所では、ご自分と神さまとの関係について語る必要があったのです。

イエスさまが、この箇所ですべて語っておられることは、まず、神さまは自分にとって「父」であり、自分はその父なる神の「子」であるということです。この父と子という関係で、イエスさまが語ろうとしていることは、父なる神とわたしとは一つであるということです。しかし、「子」は「父」そのものではありません。イエスさまは、「神の子」でありつつ、「人の子」として、この世に来られた方です。つまり、私たち人間を救うために「人」となられた「神」であり、「全き神」でありつつ「全き人」となられた神なのです。この同じでありつつ、違うというこの関係をイエスさまは、この19節で、「子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事も出来ない。父がなさるこ

とはなんでも、子もその通りにする」と述べています。ここでは「子」の無力さということが述べられています。このことは、30 節でも繰り返されていることです。「わたしは自分では何もできない。ただただ父から聞くままに裁く」と。イエスさまは、「人」となられた「神の子」の無力さを語りつつ、だからこそ、父のなさることを見聞きして、父のなさる通りにすると言われるのです。

イエスさまがこのような言葉で言わんとしていることは、あの 38 年間病んでいた病人を立ち上がらせたのも、これまで為した他の「しるし」も、父なる神さまのみ心であって、自分はただ父のみ心に従って為したに過ぎない、ということです。

さらに、イエスさまは 20b で、「また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる」と語られました。このさらに「大きな業」とは、何かというと、21 節で語られているように、「父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える」というのです。

死者の復活ということは、現代の私たちにとって、分かり難いことであり、信じがたいことです。しかし、天と地にあるすべてのものをお造りになり、私たちに息を吹き込まれ、命をお与えになった父なる神に、出来ないことはありません。世の始めがあるなら、世の終わりもあるのです。そして世の終わりには、すべての者が甦らされて、父なる神の前に裁かれ、善と悪がはっきり裁かれるのです。その父なる神の復活と裁きの業に、神の御子であるイエス・キリストも関わっておられるということです。

24 節でイエスさまはこう言っておられます。「はっきり言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また裁かれることなく、死から命へと移っている」。イエス・キリストを通して父なる神を信じる者は、「永遠の命を得る」というのです。

「永遠の命」とは、肉体的にいつまでも死なないという「不老長寿」という意味ではありません。私たちの肉体は「土から造られ、土に帰る」はかない死すべき存在です。しかしイエス・キリストを通して永遠なる神を信じる者は、神の命にあずかって、死んでも生きるのです。つまり、神さまとの霊のつながりは、肉体の死によっても断ち切られないのです。たとえ死んでも、私たちは神さまの命にあずかって生きるのです。そのことが、25 節で「はっきり言うておく、死んだ者が神の声を聞く時がくる。今やその時である。その声を聞いたものは生きる」という言葉で語られているのです。「今やその時である」とは、御子イエス・キリストの十字架の死と復活の時が、すでに来ているということを示していると思われまます。

この御子イエス・キリストを信じる信仰をもって天に召された者は、イエス・キリストの贖いの恵みと復活の命にあずかって、「肉を離れて神を見」、また直接「神の声を聞

き)、神の御許で「生きる」のです。死人の復活ということは、そういうことだと思います。私たちキリスト者にとって、死は「滅び」ではないのです。新しい命の始まりなのです。ナチに抵抗して39歳の若さで処刑されたボンヘッフアーは、処刑台に上る際、遺された仲間たちに「これが最後です。しかし、私にとってこれが命の始まりです」と語ったと言われます。

ヨハネ福音書の11章に、「ラザロの復活」の記事があります。その中でイエスさまは、泣き悲しむ姉のマルタに「あなたの兄弟は復活する」と言われ、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも決して死ぬことはない」(25節)と言われました。父なる神のうちにある命は、子なるイエス・キリストうちにもあり、ラザロをも死から命に生き返らせたのです。

私たちは、イエス・キリストを信じる信仰によって、すでに永遠の命にあずかっているのです。たとえ肉体は朽ち果ても、イエス・キリストを通して与えられた命は、尽きることはなく、父なる神の御許で生き続けるのです。

あの38年間病みつづけ、生きる望みさえ失いかけていた病人に、主イエス・キリストが「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」と命じて立ち上がらせた出来事は、主イエスがまことに「神の子」であり、死人をも甦らせる「命の主」であることを証しする「しるし」であったのです。

今、コロナウイルスの蔓延の中で、多くの人が病み、命を失った方も多くあります。それらの人々のことを、痛みをもって覚え、主の平安を祈るものです。今日ほど私たちにとって、「死」を身近に感じさせられるときはありません。お互いに十分に、注意する必要がありますが、同時にこのような時であるからこそ、私たちは、しっかりと活ける主に立ち帰り、その命にあずかり、与えられている一日一日を、主の前に悔いなく歩み、共に主の復活の恵みにあずかることを祈り求めるものでありたいと願います。

預言者エゼキエルは、イスラエルの危機に際して、主から告げられた言葉として、このように語っております。「イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいであろうか。わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」(18:31 b)と。「この立ち帰って生きよ」という言葉は、前の聖書では「翻って生きよ」と訳されていました。

御子イエス・キリストは、私たちに永遠の命を与えるために、この世に遣わされ、十字架の道を歩まれ、復活されました。主の復活の命にあずかって、共に「翻って生きたい」と願います。

アーメン